



たものである。このタイトルにあげられた刺激的なテーマの結論は、当たり前ではあるが、「遺伝子に魂はない」というものであった。

遺伝子は物質としての人間の連続性を伝えていくが、魂は別次元で、生命の連続性を伝えていくものとして考えなければならぬと結論づけている。

### 《スピリチュアルとは》

人間は、肉体と心とスピリチュアルな存在の三つの要素から成り立っているのではないかと考えている。

一般に、私たちは自分の身体を自分のものだと思っている。しかし、物質レベルで見たとき果たしてそうなのだろうか。私たちの身体は、酸素、炭素、水素、窒素などの元素から成り立っている。これらの元素は、すべて地球上の元素からきている。

つまり、地球上の元素を無機物の形で植物が摂取し、その植物を草食動物が食べる。そして、私たち人間は、その動物や植物を食べて生命を維持している。したがって、私たちの身体を構成する元素は、元をたどれば、すべて地球に由来するというわけだ。

そうすると、私たち人間の身体は、地球から「借りている」と言えなくもない。借り物である証拠に、私たちの身体は、一定期間は地球上で使うことができるが、やがて消滅して物質となり、地球に還元せざるをえない。今風に言えば、地球から一時レンタルした身体を、死という期限が来ることによって返却するのである。

このように考えると、物質レベルで私たちの身体の貸主は地球ということになる。それでは借り主は誰か。それが、それぞれの人のスピリチュアルな存在ではないか。

末期状態や難病をかかえた患者は、自分の人生の意味が分からない等の心や魂の痛みをもっている。これはスピリチュアルペインと呼ばれる。これらを癒やしていくことをスピリチュアルケアと呼ぶ。このケアが必要なのは、単に病人だけではない。

健康人を含め、私たちが真に健康に生きるためには、医療とともに魂の問題を含めた深い感性が必要であると思う。(むらかみ かずお)

## 幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよっとひとこと」

(善本社刊) から

### 幸福(しあわせ)

神仏に手を合わせる時、幸福になるというのが、左と右では、掌に刻まれた皺が違い、かつして「皺合わせ」にはならない。そこで考えてみたら、

人間は、みな、それぞれ、生まれて育った環境の違いにより、物の見方、考え方は同じではない。だが、その違って合わない相手に合わせる時、

幸福になると、神仏が教えている。

だとしたら、あわせられる人間より、あわせられない人間になりたいたいものだ。

### 『稿本天理教祖伝逸話篇』

190

明治十九年夏、松村吉太郎が、お屋敷へ帰らせて頂いた時のこと。多少学問の素養などもあった松村の目には、当時、お屋敷へ寄り集う人々の中に見受けられる無学さや、余りにも粗野な振舞などが、異様に思われ、軽侮の念すら感じていた。ある時、教祖にお目通りすると、教祖は、

「この道は、智恵学問の道やない。来る者に来なと言わん。来ぬ者に、無理に来いと言わんのや。」と、仰せになった。

このお言葉を承って、松村は、心の底から高慢のさんげをし、ぢばの理の尊さを、心に深く感銘したのであった。

\*松村吉太郎 『道の八十年 松村吉太郎自伝』昭和25年 養徳社刊

同書によると、先生は小学校卒業後、十六歳から八尾の吉川塾で漢学を学び、十七歳から堺の師範学校へ入学すべく土屋鳳洲塾で漢学と算術を研修(約一年)したが、家庭の都合で師範学校進

## この道は

学をやめて、高安の村役場に勤めていた。

この逸話篇の話の後の所感を記されています。「私は胸板に針をつきさされたように思った。見ぬき見通しの親神様の前に、いさぎよく仮面をぬいで、心の底から高慢をさんげした。」と。

そして、こう続けている。

「考えてみると、人を見下げたり、馬鹿にするほどの学問を身につけていない。ただ僅かばかり差のある尺度で人々の表面をはかっていただけであった。

こんなことで人の心の奥深いところにあるものを見られるはずがないと思っただ。殆どが妻も子もある人々であった。それを世間的な一片の教養で律しようとした私は明らかに間違っていた。土にまみれながら、しかし慾を忘れてひたすら、その内面を見なければならぬ。「人間」を見なければならぬと思った。」

次の有名なおさしづも松村吉太郎先生のいたただかれたもの。

聞き分けば十分よし。神一条の道一寸難しいようなものや。一寸も難しい事はないで。神一条の道こういいう処、一寸も聞かしてない。天理王命というは、五十年前より誠の理である。ここに一つの処、天理王命という原因は、元無い人間を拵えた神一条である。元五十年前より始まった。元聞き分けて貰いたい。何処其処で誰それという者でない。ほん何でもない百姓家の者、何にも知らん女人。何でもない者や。それだめの教を説くという処の理を聞き分け。何処へ見に行ったでなし、何習うたやなし、女の処入り込んで理を弘める処、よう聞き分けてくれ。内々へも傳え、身の内かきものや、かりものや、心通り皆世界に映してある。世の処何遍も生まれ更わり出更わり、心通り皆映してある。《以下略》(21・1・8)

親神様の思いを整然と凝縮して述べられているという感じがします。